



巻 頭 言

知 識 と O J T

鶴 田 匡 夫*

ある事柄について「自分はどれだけ知っているか、また知っていなければならないか」という問いかけは、私たち製造業で働く技術者にとって切実な問題である。理解するという事は決して容易ではないし、その上ひどく時間がかかるものだ。一方、お弟子さんたちには仕事場に椅子を置かせなかったという、さる金属物理学の大家の実習第一のやり方もまた、大学・メーカーに共通する on the job training (OJT) の真髄を伝えるエピソードと言えよう。

毎年迎える新人たちを、どうすれば一日も早く開発の第一線で働けるように教育するかは、私たちが日頃腐心するところである。しかしながら教育は栽培飼育ではないから、バイオ技術で促成というわけにはいかない。

企業の開発活動の単位は数人から十数人の小集団である場合が多いと思われる。その中で、未知、未開拓の領域を切り拓く共通の意志が形づくられ「必要は発明の母」という標語がいわば指導原理になって、仕事が進められる。しかし一方では、私たちが利用するのは結局のところ自然現象であるから、きわめて基礎的な現象の理解から議論を始めるのが、明晰な見通しを立てるための近道であるし、そのほとんど唯一の手段が物理学の正確な知識とそれに基づく自分の頭脳による推論であろう。「知識は発明の父」でもあるわけなのだ。

この「母」と「父」が相拮抗し、得意なところを分担しつつ、車の両輪となって仕事が進行するようなグループがあるなら、そこに新人を抛り込み、それで教育の悩みはほとんど解消ということになるだろう。しかし、多くのグループではどちらか一方の親、特に「母」の方に重心が片寄っているのが実情のようである。また新人の側でもグループの足手まといにならないためには、「基礎科目」の再履習を必要とするなど、新人教育の悩みは尽きない。

科学・技術の流れが速く目まぐるしく変わっていく現代にあっては、昨日の常識が今日の非常識になる場合もあり得る。経験でものを言うと、途端に座が白けてしまう場面を、そうとは気付かず作り出してしまった、というにがい経験もある。こうなると、どちらが新人なのかかわからない。苦勞して積みあげてきたことが、気がついてみると陳腐になってしまっていた。この自覚ほど残念なことはないが、これもまた経験の多寡によらず、現代の技術者の宿命なのかもしれない。

* (株)ニコン光学本部 〒140 東京都品川区西大井 1-6-3